ドラマにおける疑似夜景

NHK 製作技術局 門

弘

ドラマにおける疑似夜景の手法は、昼間の収録によって、真の夜景効果を得る技術的な制作手法である。テレビカメラによるこの手法の屋外ロケは、制作上の利点も多いことから増える傾向にある。そこで、その背景と、新しい技術手法について紹介する。

1. ま え が き

最近、テレビドラマに海外のめずらしい情景や、国内のビデオロケーションの画面が多く登場するようになった。これらの情景や芝居のシーンには、昼間もあれば夜のシーンもある。ところで、夜のシーンについては、必ずしも夜間にロケーションが行われるとはかぎらない。昼間に夜のシーンを収録する場合も多い。疑似夜景の手法は、昼間の屋外の情景を夜間の情景にかえて制作する技術的な制作手法である。そこで、この手法が盛んに用いられるようになってきた背景と、新しい技術手法について紹介する。

2. 疑似夜景収録へのニーズ

2.1 ビデオロケへのニーズ

1台のハンディカメラと、1台の小型標準 VTR、それにカラーモニター、波形モニター、これだけをコンパクトに組み立てて手押車にのせて移動する。これがドラマロケの素材収録である。電源容量もロケ先の家庭用コンセントで充分となり、山奥や海岸でも発電機やバッテリーを使用すれば不自由をしない。また疑似夜景を行うために特別な機器を現場に用意する必要もない。この手軽で簡便さが画質の良いビデオロケを盛んにさせ、疑似夜景の収録回数もまた多くしてきたといえる。

さて、ビデオロケは、フィルムロケと違ってカラーモニターがあるので、リアルタイムに映像表現を監視できる。フィルムロケのように現像処理などが要らない優位性からもニーズが多くなってきた。

2.2 本物の夜景は疑似夜景から生れる

暗夜にロケをしても写らない。写らないから照明をあてる。しかし照明をあてても、夜の海岸シーンは膨大な

照明が必要で、波の反射光を期待するぐらいしかない。人物が登場するシーンでも、ワイド画質が収録できなければ屋外ロケの意味がない。暗くて写る被写体がないので、登場人物を中心にしたカメラワークにするくらいなら、スタジオの黒幕前で収録した方が気がきいている。本物の夜のシーンは、まず情景のすべて、被写体となるものはすべてを写しだすことにある。そして、感覚的に夜のムードが画面上に創作できればよい。創作のテクニックが疑似夜景の手法そのものである。屋外ロケがふえれば疑似夜景もふえてゆく。と同時に、よりほんものにみえる夜景がうまれる。

2.3 疑似夜景の必然性

ドラマ制作には、1年間放送のシリーズドラマもあれば半年間のシリーズドラマもある。また単発ドラマとして前・後篇で放送するものもある。いずれのドラマもスタジオ制作を基本にして制作がつづけられているため、制作がスタートすると毎週、毎週の放送分は、どんどん撮りこみ制作してゆかねばならない。屋外ロケは、これらスタジオの制作スケジュールの合い間にスタジオで制作するため、天候や、夏、冬の日照時間の違いなど、制作スケジュールに影響する条件が多い。また、ドラマに登場する出演者も、NHK、民放、映画など、1人で各所に出演するケースが多い。

このような制約を考えると、夜間のシーンを制作するのに夜間の時間帯に出演者が集まらなければ、昼間に夜間シーンのロケをどうしてもやらざるをえない。

また、夜間のロケ現場は、暗い中で、照明器具のセッティングや、その操作、および作業量が多く、何かと複雑になる。制作時間も、修正や変更により長時間を要する。これに対し昼間の制作は、疑似夜景のテクニックを駆使すれば照明器具の配置も少なく済み、作業の安全性からも有利になる。深夜におよぶ作業も少なくなる。そしてまた屋外ならば、あり物をそのまま利用するチャ

“‘Shooting Day-For-Night’ on Drama” by Hiroshi Kado (NHK Engineering Operation Dept., Tokyo)

ンスも多くなる。そこでスタジオの中で使うような大道具、小道具も少なくなり、屋外制作の効率を高める。

以上のような、いくつかのニーズは、ドラマ制作に最も重要な要因で、疑似夜景の手法で制作することは、制作の基本を改善することになる。

3. 技術的手法

疑似夜景の手法を使うチャンスが多くなると、技術的な手段にも改善が加わり、便利に、早く、しかも映像表現にも多様化がみられる。次々と新しい技術が生れるのも当然であろう。まず、昼間ではあるが夜景の絵づくりは、スタジオと同じ照明手法を使う。一方、疑似夜景のための映像調整は最初、レンズ前のNDフィルターの選択から始まる。次に、ホワイトバランス調整、ベデスタル調整、色温度特性の調整、等々がある。

そのほかに今回、特に新しい手法としてテレビカメラのプロセス系におけるガンマ特性の調整を行っている。これら総合した結果を現場のカラーモニターで監視しながら絵づくりを行ってゆく。ここでいくつかの中から1つ実例をあげて説明する。

NHK 大河ドラマ「黄金の日」(52.9.10 放送の第36話「伴天連追放」)より

疑似夜景は、まずロケ現場をさがす条件に、空の部分に極力さけることから始まる。図1の現場(川崎市生田付近)も、山道の空の部分は、木のしげみにおおわれた薄暗い場所を選んでいる。人物の動きについては、主役

図1

現場の色温度は7500K、カメラB位置の人物の顔は4.5kWのミニブルーを使用、B3コンバージョンフィルターを付加して5600Kに変換

図2

の助左エ門(市川染五郎)が約30mの距離をタイマツを片手に、図の関係位置の中を正面に近づいてくる。サイズはワイド画面から入って、だんだんと歩きのテンポにあわせてアップの画面となる。この長い移動を、常に炎の明りが顔に映えている。このムードを、夜間照明により表現する。通常、テレビカメラのガンマ特性は、図2のA点をKnee-pointとして、100%の出力レベルとしている。

ところが、点線のようなガンマ特性にすると、人物のフェーストーンのディテールを生かした状態で、レベルを上げることができる。空の部分は、逆に暗くなり、図2Cの部分まで出力レベルは下る。一般に、昼間の建物、草木などは、2000ニットまでの、Bの範囲内に含まれている。要するに、100%の出力レベルを越える空や海面などに対して、図のようなパラボラ形のガンマ特性を生かすと、空のレベルは下り、暗くなる。

このようにして、明るい面積の部分は暗くおさえ、一方、暗い面積の出力レベルを全体に上げることができる。そして、スタジオ照明と基本的に同じ表現法を用いて夜間照明を行ったり、あるいは補助照明をくわえてカラーモニターを監視しながらの絵づくりを行う。

4. 現状の問題点

4.1 疑似夜景専用プロセスアンプの製作

ビデオロケに出かけると、ロケ現場は1カ所ではすまない。午前中2カ所、午後2カ所と、1日で3~4カ所を移動して収録する場合がある。また、収録シーンも制作スケジュールの都合にあわせて組んでいるため、昼のシーン、夜のシーンが交互になることがある。そして、同じ日に同じ場所で再びもどってきてロケする場合もある。このような条件にあわせて、そのつど疑似夜景のガンマ特性を含む映像調整と標準の収録による映像調整を

くりかえすことは能率が悪い。そこで将来、疑似夜景用のプロセスアンプを常置しておき、現用と切換えて迅速に実施できる方法を考えている。

4.2 新しい照明技法や新機材の開発

照明器具の改良と全く別に、新しい照明手法による映像技法を考えている。当面の問題点は、疑似夜景の照明器具に 10kW 級の大きい器具を使用しているが、重量、数量とも現場の移動が大がかりである。このため、少しでも軽く小型で持ち運びが簡便な照明器具を開発してゆかねばならない。新しい光源、メタルハライドランプを使った器具の開発に注目している。

5. む す び

疑似夜景の手法を採用したドラマは過去にいくつかある。しかしビデオロケで制作スケジュールを組んで本格的に実施したのは「黄金の日日」が最初である。

フィリピンでの海外ロケを初め、国内ロケで多くの疑似夜景を放送して好評を得ている。

今日まで絵画やフィルム、特に映画では心理的な効果をあげる明暗の圧縮技術（疑似夜景）が行われてきたが、われわれもこれらを参考にして、より新しい工夫をこらし、今後、発展させてゆきたいと考えている。

（昭和 53 年 12 月 1 日受付）

画像エレクトロニクス講座

全10巻（既刊 9 冊）

（社）テレビジョン学会 編

① 画像エレクトロニクスの基礎

宮川 洋・渡部 敏編著…………… ¥4,000

② 撮像工学

二宮輝雄・長谷川伸・和久井孝太郎編著 ¥4,800

③ 画像ディスプレイ

大石巖・大越孝敬・中山典彦編著…………… ¥4,200

④ 画像の記録と再生

稲津 稔・秦 正次・横川幸次郎編著… ¥7,000

⑤ 画像電子回路

宇都宮敏男・和久井孝太郎編著…………… ¥5,200

⑥ 画像伝送とその機器

佐藤秀夫・林 宏三・林 義昭編著… ¥4,800

⑦ テレビ送受信とその機器

石橋俊夫・遠藤敬二編著…………… ¥4,700

⑧ 画像のソフトウェア

栗田 稔・高橋 秀・竹下彊一編著……… 続 刊

⑨ 画像の情報処理

榎本 肇編著…………… ¥4,500

⑩ ファクシミリと静止画像

窪田啓次郎編著…………… ¥4,100

東京都文京区千石 4-46-10
郵便番号 112

コ ロ ナ 社

振替東京 4-14844
電話 (03) 941-3131(代)